

第10回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2

オペラ《アルチーナ》

演奏会批評（那須田務氏）

『音楽の友』2013年3月号：p.131

第10回ヘンデル・フェスティ
バル・ジャパン《アルチーナ》

1月14日・浜離宮朝日ホール●野々下由香里（魔女アルチーナ）、波多野睦美（ルツジエーロ）、山下牧子（ブラダマンテ）、高橋薫子（モルガーナ）、辻裕久（オロンテ）、牧野正人（メリッソ）、広瀬奈緒（オベルト）、三澤寿喜（指揮）、キャンノンス・コンサート管弦楽団&室内合唱団●ヘンデル《アルチーナ》（演奏会形式）

ヘンデルの作品の研究と紹介に努めるH.F.J.。今回は「魔女にみるヘンデルの人間愛」をテーマに、ヘンデルの《アルチーナ》が演奏された。初演版全曲が省略なしで演奏される機会は日本では極めて稀。三澤寿喜の指揮、キャンノンス・コンサート管。関東地方が大雪のため15分遅らせでの開演となった。コンサート形式、休憩を含み4時間以上の長丁場をまったく飽きさせないのは、魅力的なアリアがふんだんに盛り込まれているというだけではなく、演奏に負う所が大きい。フランス風序曲は堂々としたサウンドとアフエクトで

始められ、その後も、可憐な高橋薫子のモルガーナ、豊かな表現力の男役波多野睦美、内面を仮面に隠した女王風の野々下由香里のアルチーナの他、山下牧子のブラダマンテ、牧野正人のメリッソ、辻裕久のオロンテ、広瀬奈緒のオベルトと、パロック歌唱に精通した8名が熱演を繰り広げた。合唱も各パート2人と思えないほど濃厚。総譜の細部まで丁寧に扱い、その魅力を余すところなく引き出そうとする指揮と共に、充実した聴後感を与えることに成功していた。

●那須田務